



第 18 号

徳島 1916 年 1 月 23 日



皇帝誕生日

炎が天に燃え上がり
施条砲からの知らせが
とても力強く響き渡る
ドイツの圧倒する時代が来たと。
さらに偉大なドイツが蘇るであろう
われわれは滅亡を望まないし、また滅びないだろう、
戦い、そして勝利することがわれわれの望みである、
そうとも、皇帝が勇敢な軍隊を率いるからには。

数え切れないほどたくさんの敵が、世界の諸国民が
ドイツの広野を包囲した。
大地に鳴り響くのは馬蹄の音、
多量の弾丸がヒューヒュー飛び交い
轟きわたる戦いの音が大気を震わせる。
だが、ドイツが立ち上がれば敵はただでは済まぬ、
皇帝は威厳に満ち溢れ、そしてドイツ軍最高司令官として
海軍の艦隊をこちらへ導く。

恐ろしい程に激しい戦いのなかで
敵の軍隊は戦いながら震え抱きあっている、
諸国民の将来の運命をこの戦いが決定するので、
びっくりしている世間の人びとの無数の眼差しは
ヴィルムヘルム二世、すなわち無敵の英雄に向けられている。
彼はドイツ陸軍を勝利に導き、

海軍の艦隊の栄えある戦いの先頭に立っている。

だが、今日この時、天国の門に押し迫っているのは、何百万の
敬虔な祈りである。

今日われわれの心を深く揺り動かしている望み、それは皇帝の
無事と皇帝への祝福である。

だから皇帝誕生日にわれわれは休息する、神よ、わが君を
守り助け給え！

全ドイツが天に向かって懇願し求めているのは
皇帝の長命を！皇帝の無事を！

W. バルハイマー作

ヴィルムヘルム二世と戦争

敵は皇帝を、この戦争を数年前から希望し準備してきた人物であるといつも糾弾している。それは、追われている犯罪者自らが「泥棒を捕まえてくれ」と声を限りに叫ぶのと同じ類のものである。厳正に判断することが出来、この種の馬鹿げたお喋りから離れているわれわれドイツ人にとって、このお喋りと関わり合うこと自体無駄である。というのは、われわれの誰もが、皇帝は心から平和以外の何も望んでいないことを知っているからである。がともかく、もとより数はごく少ないが — 苦悩と憎しみの時代に、明確な判断力を持ち続け、しかももっと大切なものだが、自分の意見を擁護する勇気があるイギリス人がまだいるということを。そうした一人に数えられるのがまずもってヒューストン・スチュアート・チェンバレンである。彼はドイツ的方法とドイツの本質を理解し、愛することを身につけた稀有な外国人である。しかも、彼にとって、ドイツはずっと以前から第二の故郷になっていた。彼が著した『戦争レポート』にはこう書かれている。

幸せの女神が私に味方している。全ての地方出身、全ての身分出身のド

イツ人は、私が日々関わらねばならない勇敢な手工業者に至るまで、皇帝陛下について基本的に正確に知っている。教師・学者・商人・銀行家・将校・外交官・技術者・詩人・ジャーナリスト・官吏・芸術家・医者・法学者、これらの人びとを私は親しく知っている。これらの人びとはいずれも好戦的であるとか、あるいはもっと正確に表現すれば、戦争をしたくてたまらないとか、そういう人たちでは断じてなかった。これに対し、私が最近イギリスを訪れた 1907 年と 1908 年のことであるが、そこでは至る所でドイツに対するまさにビックリするような見境のない憎しみと殲滅戦争への性急な期待が見受けられた。他の国民に対する敵意は全くないのが、ドイツ人の最も注目すべき特徴である。しかも、これはドイツ人だけに特有のことである。むしろ、ある面でドイツ人は外国人の手柄を過度に認め過ぎるくらいが常にある。とりわけ、ドイツ人は誰でも知っていることだが、自分の国の地理的状況からしてそもそも戦争を危惧しなければならず、それに手を伸ばそうなどと考えてもいない。過去 40 年間のドイツがそうであったように、工業・商業そして科学が年を追うごとに栄えている国民が、全てを破壊しつくす戦争を果たして起こすだろうか？

私は自分に割り当てられた領域を越え、非常に多くのことを無視し、今日の一つのことに集中したい。すなわち、もっと皇帝ヴィルムヘルムについて語りたい。今、彼は決定的な影響を与えることができる唯一の人物であろう。私は皇帝に何度もお目にかかったことはないが、しかしとりわけ都合のよいときにお目にかかったことはある。すなわち、宮廷の礼儀作法の場以外での、自由な意思交換の折にお声に接することができたのである。私は、決して君主の言葉を繰り返しはしなかった。何故なら、それは彼が私に秘密を打ち明けたからではない。非常に危険にさらされた陣地にいる兵員に、彼の言葉がどのような影響を与えるのかについて、われわれのような者は誰も予測できなかったからである。今日でも、私はこの原則から逸脱したくない。とはいえ、私が次のように言うとしても、決して私は無思慮ではない。この重要人物のなかにある二つの特徴は、彼の感情、思考、

行為の全体における「主たる特徴」として、私にとっては何にも優る注目すべき価値があるように思われる。すなわち、深くて決して消えることのない、神の前での責任感、そして — このことを通して真剣かつ厳格に条件づけられているのだが — ドイツの平和を維持するとのエネルギーで命令的な、それどころか — たとえ逆説的な響きを持たなくとも — 荒々しい意志という二つの特徴である。ドイツの力は — ドイツの福祉の多くはそれに負うのだが — 戦争を呼び起こしたのではなく、むしろ悪意を抱いている者に平和を押しつけるはずであった。皇帝の行為は、まさにそのことを証明している。というのは、最近の 10 年間に状況はドイツの名誉にとってほとんど耐えがなくなり、 — イギリスはこのことのためにあらゆる限りの力を尽くした — 繰り返し平和を押し通したのは皇帝その人だったからである。およそ、ドイツに戦争を好む政党が存在したということはない。それはタイムズ誌の嘘である。確かに、責任感に満ちた政治家と兵士は存在し、当然のごとく彼らはこう言った。イギリスとその仲間があらゆる犠牲を払って戦争を望むとすれば、彼らは即刻そうするだろう、と。しかし、神にかけて言うのだが、皇帝はこの論拠を押し通すことができなかった。彼は剣を鞘に収めた。ヴィルヘルム二世は — 私は心底そのように確信しているが — 臨終のときに自分に向かって次のように言えること以上の願望をもっていない。つまり「私は自分の国の平和を断固守り、そのことによって歴史は私を「平和皇帝」と呼ぶであろう」と。そして、神がドイツとオーストリアの同盟軍に勝利を、敵の意気を沮喪させるような完全な勝利を与えるならば、 — そのような勝利をわれわれも神に懇願している。ドイツ人でないわれわれも。ただしわれわれにとって文明化された人類の安寧と文化が、国民的虚栄心よりも高いものであるかぎりにおいてだが — その場合に、まさにその場合にのみ、ヨーロッパは 100 年間の平和を享受でき、そして偉大で善良ではあるが外国の玉座に座っている同じ身分の方々から見れば、非常に破廉恥にふるまう君主の意志は、なお自分が思っている以上に輝いて実現されるだろう。と同時に、それは誹謗と虚言に対

してドイツの正当性を弁明するであろう。彼と彼自身の作品である軍隊が平和を作り上げた時に、はじめて彼は「平和皇帝」と呼ばれるだろう。

七福神（2）

もう一人の中国人は、その出身地はどこかもはや分からないが、太った布袋(ほてい)である。彼は仏教徒の托鉢僧として、中国の僧院にほぼ 1,000 年前前に住んでいたとされている。彼はごく些細な贈り物も、決して貶めて撥ねつけることはしない。たとえそれが自分自身の利益になるものであれ、それによって他人を助けることになるものであれ。彼は絶えず歩き回ったので、当然たくさんのことを体験し、また自分と関係する全ての者がもつ人情の機微に通じていた。何ものも、決して彼の強靱なバランス感覚を壊すことはなかった。手本とすべき彼の親切さと満足感が感謝をこめて記憶され、布袋は死後、神として崇められた。彼は厚ぼったい耳を持ち、無精髭を生やした太鼓腹の禿げ頭として描かれている。彼はだらりと垂れた衣から毛むくじらの胸と太鼓腹を露出させ、また幅のある川を渡るための長い杖が入った大きな袋を担いでいる。われわれは日本の家々の入り口にしばしば比較的小さな布袋が置かれているのを目にするが、これはお客さんに対し歓迎の意を表したものである。布袋はまた非常に子ども好きで、世の中をめぐる漫遊にはいつも悪戯小僧の一団が付き添っている。

日本固有の起源を持つ唯一の幸運の神が恵比寿、つまり微笑みの神である。おそらくそれは形を変えた神道の神で、この地で出会う神道の神の形を変えたものである。彼は航海と貿易の保護者で、かつ海洋の偉大な友である。彼は足を交差させ、海水が周りを洗う岩の上に座っている。頭には両端が尖った帽子を被り、微笑んだ顔には先の細くとがった顎髭が蓄えられている。片手に釣竿を持ち、もう一方の手には日本人がお気に入りの魚

である鯛を持っている。恵比寿はいつも大黒、つまり最も名の知れた家の守り神といつも一緒にいる。そして、この二つの姿は神棚、つまり家庭祭壇のための壁棚にほぼ見ることができる。

七福神が、一つの集団にまとめて描かれるのは比較的最近のことである。狩野派の二人の画家が約 400 年前にはじめて、おそらく中国の七賢人を模して描いた。いずれにせよ、それは日本人の感覚に全く合致した非常に適切な思想だった。もしそうでないなら、それは数百年の長きにわたり日本の国民性に合致したものとして維持されることはなかっただろう。

演 劇

この前の日曜日に、ルートヴィヒ・ヤコボウスキーの『労働』とゲオルク・エンゲルの『警鐘』が上演された。

『労働』は時宜を得た好感の持てる戯曲である。それがここで上演される必要性はあると思う。労働者の振る舞いが急変するのは、労働者の代弁者への依存とその性格からして十分納得がいく。労働者の心的態度の変化は、老ビングとの個人的関係から、並びに若きビングの大胆で尊敬の念を起させる行為によってまたもや明らかになる。しかし固く決意して提出された訴訟が、実際に労働者の側からいとも簡単に放棄されたのは、たとえ全くありえないことではないにしても疑わしい。ここでわれわれは、近代的劇作家としては許されることのできないその詩人の弱点を、場合によっては証明することができる。というのは近代は、現実世界のできごとの幻影を想起する妨げとなるもの全てを退けるからである。

舞台では素敵な労働者が演じられて戯曲全体が澁刺とし、その美しさをよく理解して最後まで演じられた。息子ビング役を演じたカンプツィークは、男役も見事に演じることができることを証明した。他方で、女役を演じる新たな才能がスプルツェンに見られたことは喜ばしい。

『警鐘』—この戯曲の舞台となったのは、ベルリンで生じた 1848 年革命の時代である。ドイツは自意識に目覚めた。解放戦争以降、人びとは政府への参加、憲法、国民代表制を求めた。プロイセンでは民衆は足止めされ、遂にオーストリアの肝入りで新しい理念の指導者と精神的担い手は大逆罪の犯人として迫害された。それが火種となった。玉座と民衆との間の亀裂は常に最後まで深く、フランスの新たな革命がきっかけとなり、1848 年春に公然たる反乱が勃発した。ゲオルグ・エンゲルは、われわれを 48 年という気違いじみた時代の真っ直中に導く。親方ナーゲルの息子は「煽動的策動」のため城塞禁固刑に処せられ、長年の間監禁され、そこで亡くなった。このことは父親を政府と敵対する人民党へ走らせ、政府と親密な関係にある諸身分に対する憎しみと憤慨を沸き起こした。にもかかわらず、妻とわが子を慮って彼は革命に加わらなかった。党员であることを理由に国家権力へ公然と反乱することを求められた時でさえ、彼はこの断固たる男らしい決心を守り通した。上級諸身分への恨みは分別を失うほど激しかったので、彼は自分の娘ヘレーナに対する少尉の心からの愛を恥ずべき恋愛関係であると見なした。彼の非常な憤懣は、少尉が職務上の命令から彼の家に足を踏み入れた時公然と爆発した。親方は恋人同士が固く抱擁しているところに、いきなり現れたのである。それに続く口論のなかでその士官が親方の不幸な息子の運命に言及した時、親方は自分の息子が罵倒され、自分の家で娘が辱められたと思い、革命の大河のなかでにわかに起こった荒々しい憤激のなかへ飛び込んで行った。彼は士官と対峙して戦うことになったのである。二人を分け離そうとしたヘレーナは瀕死の重傷を負い、そして亡くなる。—自由の犠牲者となって。

その戯曲は劇的文学的な価値の点で以前のものを凌駕しており、上演もまた今までの優れた成果をさらに上回る成果を挙げた。たとえば大舞台上で上演されたとしても、それ以上に素晴らしく表現され得ないと思われることがたくさんあった。役割は全体的確に分担され、細部にまで入念に仕上げられていた。とりわけ、ナーゲル夫妻は、オールとシュマーレンバッハに

よってまさに衝撃を与える程のリアルさで演じられた。装飾、新しい様式上の調和のある出窓の張り出し部、これらは卓越した演技と相まって全体に次のような雰囲気醸し出した。観客がその戯曲を完全に芸術作品であると思い込んで味わい、感銘を後に留めるに違いない雰囲気を。

『警鐘』の上演は、われわれの演劇人が上演を続けていく中でさらに歩みを進めて、わが国の戯曲作品の不朽の名作にまで上昇していくことを約束するものであった。

ホーエンツォレルン家の 500 年

昨年(1990)の 10 月 21 日で、それまでニュルンベルクの城伯だったブランデンブルクのフリードリッヒ・フォン・ホーエンツォレルン家に諸身分が忠誠を誓ってから、ちょうど 500 年が経過した。ホーエンツォレルン家の歴史は、ドイツの歴史になった。ドイツ人をスラブ人の怒濤の波から守り、そして過去に失われた東部ドイツの土地をゲルマン人に取り戻すことが肝要であるとの見地からすれば、ホーエンツォレルン家は何人も感嘆せざるを得ない粘り強さと責任感によってこの課題を実現したことが分かる。彼らが内外の敵と戦い、自らと自らの国家原理を再三再四押し通したのをわれわれは知っている。巧みな政治によって、小さな取るに足りぬブランデンブルクに新しい領域が編入され、このブランデンブルク・プロイセンからドイツの指導を引き受けることのできる国家が誕生した。その国家は、ブランデンブルクの辺境伯から今日のプロイセンに連なる自動的發展の姿を取ったのではない。歴史のページを捲れば、支配者の権力的な介入がしばしば必要であり、ブランデンブルク・プロイセンは自己の権利を守るため、度々武力に訴えざるを得なかったことが分かる。否、実際にドイツ史のなかに一度分け入ってみればほぼ明らかになることであるが、すでに最初のホーエンツォレルン家の人びとは、自分の家系が何をすればよいかわ

感づいていたようである。ブランデンブルク選帝候とプロイセン国王の措置は偶然とは信じられないし、また信じたくもないほどの首尾一貫性によってほぼ完璧に貫かれている。

今日から明日へと跳躍するのではなく、否、真剣な努力と労働によってホーエンツォルレルン家とその国家は、寄り集まったドイツ人の指導者となった。重大な反撃がないではなかった。だがプロイセン鷲が勝利し、再び舞い上がったのである。

ホーエンツォルレルン家が今日の地位を築き上げたのは、単に幸運な偶然や他者の活動のせいではない。われわれは、たくさんの協力者の功績に決してケチをつけるつもりはない。また、ホーエンツォルレルン家はなによりも自らと自らの国家の偉大な建築士であったという事実を、喜んで認めなければならないし、そうしたいのである。

ドイツ人氣質は多くの抜きんでた精神と性格を具えているが、それらはこの家系のお蔭である。われわれ全員に最もよく知られている大選帝候、フリードリッヒ・ヴィルヘルム一世、フリードリッヒ大王、ヴィルヘルム一世に言及したい。いやそれどころか、ホーエンツォルレルン家の家系が天才「フリードリッヒ大王」だけを輩出したとしても、その名称は不滅であらう。

ホーエンツォルレルン家が北ドイツに足場を固めた時から数えて 500 年目を、われわれは楽しい祝祭の中で迎えることができなかった。否、この祝日は、ホーエンツォルレルン家自身が大部分作り上げたものを防衛する困難な戦いの時に当たったのである。1915 年 10 月 21 日に何千もの銃口から響き渡った轟音は、喜んで打つ礼砲の挨拶ではなく、諸国民の深刻で血なまぐさい戦いの音であった。しかしわれわれを導くのは、一人のホーエンツォルレルン家の人物、すなわちドイツ国民の指導者のなかでも最も困難な時代を担当した家系の末裔である。そしてわれわれは、このホーエンツォルレルン家の人物ヴィルヘルム二世を誇りにしているのであって、将来いつか、この人もその家系の最大の人物に数えられることになる。

第 31 回コンサート
第 3 回交響曲コンサート
1916 年 1 月 23 日 日曜日

プログラム

ヴァイオリンとオーケストラのためのニ長調協奏曲

L. v. ベートーヴェン

- a) アレグロ・マ・ノン・トロツポ
- b) ラルゲット
- c) ロンド

8 時開演

1916 年 1 月 27 日のためのプログラム

I. 「祖国行進曲」 ゴルデ作曲

II. 旗輪舞

III. 『戦争花嫁』

3 幕劇

登場人物

イエンス・ラルセン	ブレーマーハーフェンの水先案内 指揮官
リスベート	彼の妻
イルーゼ	夫妻の娘
ラスムッセン	水先案内人、水先案内汽船（「ヴェー ザー II」）リーダー
イエンセン	水先案内人
ハンス・マットヒーセン	海軍大尉、U ボートの艦長

ディルクセン

4 本マストの帆船「リスベス」の船長

一等水兵

二等水兵

見習水兵

1 人の伝令兵

「リスベス」の乗組員

ラルセンの家の 1 人の女中

2 人の市民

上演時間約 50 分

第 1 幕：典型的な北ドイツの船員用飲み屋。水先案内人、船長、航海士の行きつけの飲み屋

第 2 幕と第 3 幕：水先案内指揮官家の居間

第 1 幕と第 2 幕は 1914 年 8 月初め。第 3 幕は一ヵ月半後

IV. 二つの軍歌 男声合唱協会「ゲルマニア」による軍歌、伴奏付き

V. 『破られた封印』

登場人物

陸軍少尉、若者ヨーゼフ、女中マリーヘン

VI. 大理石グループ

7 時開演

どこへ行こうか？ 催し物案内

1916 年 1 月 22 日（土曜日）：キントップ・イーリッヒ

1 月 23 日（日曜日）：オーケストラによる交響曲コンサート

1 月 30 日（日曜日）：寄席「ミモザ」

2 月 6 日（日曜日）：合唱協会「ゲルマニア」のコンサート

2 月 13 日（日曜日）：演劇：『良心の叱責』

2 月 20 日（日曜日）：オーケストラによるポピュラー・コンサート

ザクセン人の慈善の贈り物

ドレスデンの戦時体制協会から東京の支援委員会に、1,000 マルクの金額が送金されてきた。それは、日本で囚われているザクセン国籍所有者に分配するよう求められている。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 79 問の解答

1. d2 - d4 c4(e4) x
アンパッサン d3
2. c3 - c4(e3-e4) 詰み
1. c5(e5) x d4
2. Tb4--b5(Tf4--f5) 詰み
1. 任意に別の手で
2. S で 詰み

第 80 問の解答

1. Dc7 - h7 Kd5 - c4
2. Sf5 - c3 + Kc4 - b3
3. Se4 - c5 詰み
1. Kd5 x e4
2. Dh7 - h1+ Ke5 x f5
3. Dh1 - h7 詰み
1. c6 - c5
2. Sf5 - e7 + Kd5 - c4
3. Se4 - d2 詰み
1. e6 - e5
2. Sf5 - e3 + Kd5 - e5
3. f4 - f5 詰み

正答を送ってくれたのは、ヨーゼフ・ヴェーバーである。

第 81 問 白 : Kd7, Te6, Lg1, Sb6, Ba2, b4, f4

黒 : Kb5, Ta4, Ba3, a5, a6, b7, f5

2 手詰め

第 82 問 白：Kh1, Db8, Lb1, Se7, g4, Bd3, g6
黒：Kc5, Bb2, b3, b4, c7, d7, d6, g2
3 手詰め

青島での苦難に満ちた日々から（1）

このタイトルをつけた、リヒャルト・ヴィルヘルムの著作が、ロンドンの『フッテン』出版社から出版された。以下の抜粋は、「日々の展望」という記事から抜き出したもので、われわれには次の内容からして特に興味深い。その記事が一般にわれわれによく知られた軍事的出来事を取り扱っているのではなく、もっぱら中国の都市で中国人の間でなされた体験を描いているだけにそうである。

11 月 1 日、日曜日。7 時に陸と海から砲撃が再び始まった。造船所の大きなクレーンが爆破され、ドックが沈められた。

榴弾が研究所の大講堂の屋根の一角をぶち壊したが、破裂することなくさらに先へ進み、通りで初めて爆発した。そのため、それ程大きな損害に至らなかった。さらに、女学校にはもっとたくさんの榴弾が落ちた。そのうちの一つは女子生徒の住居の二つの部屋を吹っ飛ばしたが、幸いなことに誰も負傷しなかった。鞏の若旦那¹は私の忠告に従って校舎の地下室に移動した。昼には砲撃は止んだ。2 時頃砲撃が再び始まった。次から次へと非常にたくさんの榴弾が南側の校庭に打ち込まれるのを、私は家の上の階から見ていた。すぐその後で、私はヴェランダでしくしく泣く声とうめき

1 原文は Prinz Gung で、おそらく無名の人物のため、鞏という姓はひとつの可能性を示したもので、同音の姓は他にもいくつか考えられる。この記事における他の中国人の名前の多くについても同様。

声を聞いた。その声に混ざって榴散弾と榴弾の音がビュー、あるいはキーンと絶えず鳴った。それらの弾は近くや、あちこちに絶え間なく打ち込まれた。私は向う側の学校へ行き、人びとがいる方を見た。中庭の片隅は血の海となっていて、そのなかにひどく負傷しているように見える人が一人、さらに下方に一人横たわっていた。私は人びとが途方にくれて集まっている大講堂の方へ行った。その負傷者を軒下に運ぶため、私は彼らに担架を持ってこさせた。私の指示がなければ彼らは一步を踏み出さなかったが、しかし少なくとも私の指示に従った。幸いなことに、それ以上の負傷者を出すことはなく、負傷した二人を安全な場所に移すことができた。その負傷者にワインを持って来るために家のなかに引き返したその時、瓦礫の間からもう一人が這い出してくるのを私は見た。彼は火傷で顔と手が真っ黒になり、玄関口の瓦礫に半分埋もれ意識を失っていた。担架はもうそこにはなかった。そこで、私は扉を蝶番から外して彼をその上に乗せ、大講堂へ運んだ。私がワインを取りに行っている間に、彼は亡くなった。もう一人は瓦礫に埋もれて即死した。中庭全体が血と瓦礫とぼろ切れで覆われていた。それは、最も苦しいひと時であった。しかし、神が与えてくれるはずの将来の栄光に、われわれは期待していた。(それが、今日のわれわれの合言葉である)

その直後、さらに一発の榴散弾が住宅の屋根をぶち抜いて上の階の部屋に飛び込んだ。その部屋では、見物するために数分前に私がいた部屋だった。多くの物が粉々に壊れ、あらゆる物が激しく揺れた。家全体に硝煙とピクソンの煙が立ち込め、さらに火災が生じたかと思われた。われわれが消そうとした時、幸いにも火災ではなかったことが判明した。屋根に小さな穴が開いただけだった。室内は板壁が壊れただけだった。榴散弾は床下にまだ炸裂しないまま転がっていた。下の部屋に榴散弾は打ち込まれなかった。鉛弾は至る所に散らばっていた。庭には、さらに多くの榴散弾が降り注いだ。私はかつて、図書館にそれが命中する様子を見たことがある。それどころか、半分剥がれている屋根が破壊されるのを見ることになる

思った。しかし、私がそこへ行った時に見たのは、榴弾が図書館のすぐ後ろに打ち込まれたため、壁全体に粘土とピクソンが降りかかった図書館の光景だった。屋根は無傷だった。若干の屋根瓦だけが破壊された。電話と電燈は停電のため、われわれの家では今から使えなくなった。— 夕方になって、さらに、死者を埋葬するため警察に連絡しなければならなかった。ホテルでも、負傷者が亡くなった。われわれは死者を埋葬する許可を得たが、警察には埋葬してくれる者が居なかったので、われわれは全てを自分でやらねばならなかった。

つづく



国民軍の兵士マイヤーは
休暇から帰ってきた



君、レンまでどんどん進んでくれ給え。というのは、キッチンナー
たちが来る前にエジプトへ行きたいのだ。

第一人者！

ニキは今正気に返り
自分の脳裏にはっきりと
この考えを浮かべた
自分で平和を創る！と

というのは、彼が検討したところによれば、事態は
これらブリタニア人にとって思わしくなく、
その上、ポンド相場が
大幅に下がったから。

そして、彼はますます知ることになる
次々と悲報を聞くにつけ
自分がなんと有能な友人と
結ばれていたのかを。

彼はきっと大いに心配するだろう。
希望など何もないと考える時
勝利の報いとして約束されるのは
誠実な仲間のこと

彼は今遂に理性をとり戻す
彼の国は滅びてしまう。
それゆえだめになってしまう前に
平和に手を差し伸べるほうがよい。

仲間たち全てが私のもとを去っていて
すでにずっと以前から私を避けている
事態は私にとってひどくなり
それゆえ私は講和を結ぶのだ



一つの手と一本の糸

それで何になるか言い当ててごらん
骨組みは木で作られ
その上に針金で編まれた網がかぶせられているのを
想像してごらん。

この全体が一本の木に支えられ
立っている。

その下にいくらか米を撒き
注意深く待ち伏せしなさい
何かが入ってきたら、糸をさっと引くがよい。
カタンと音がして
中で一匹の動物がじたばたともがく。

それが何か私に知らせてくれ。

